

広報

じんけん

～出会い 気づき 発見～

人権擁護都市宣言・非核平和都市宣言のまち

12月4日から10日は人権週間です

～だれもが幸せを感じるまちをめざして～

※12月10日は
世界人権デー

【世界人権宣言】

※「国際連合公報
センター」より

すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもつて行動しなければならない。

第2条

1 すべて人は、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上その他の意見、国民的若しくは社会的出身、財産、門地その他の地位又はこれに類するいかなる事由による差別をも受けることなく、この宣言に掲げるすべての権利と自由とを享有することができる。



第30条

この宣言のいかなる規定も、いずれかの国、集団又は個人に対して、この宣言に掲げる権利及び自由の破壊を目的とする活動に従事し、又はそのような目的を有する行為を行う権利を認めるものと解釈してはならない。

※世界人権宣言は、基本的人権尊重の原則を定めたもので、初めて人権保障の目標や基準を国際的にうたつたものです。

20世紀には、世界を巻き込んだ大戦が2度も起こり、特に第二次世界大戦においては、特定の人種の迫害、大量虐殺など、人権侵害、人権抑圧が横行しました。このような経験から、人権問題は国際社会全体にかかる問題であり、人権の保障が世界平和の基礎であるという考え方にもとづき、1948年12月10日、国連総会で採択されました。

人権週間

-特設人権相談の開設-

12月4日(木) 13時～16時 市役所(庁内会議室等)

※人権擁護委員がお受けします。

予約優先

人権推進多文化共生課 ☎ 072-740-1150まで

戦後80年

人権週間映画会

ところ みつかホール 定員 各480名

劇場版 アナウンサーたちの戦争

2023年 日本 113分 日本語字幕付

上映時間 ①10:30～12:23 ②15:35～17:28



報道は”真実”ではなかった。

今の時代にこそ伝えたい、知られざるアナウンサーたちの苦悩と葛藤の実話が映画化。開戦ニュースと玉音放送の両方に関わった伝説のアナウンサー・和田信賢を森田剛が演じる。

©2023 NHK

2025年
12月6日(土)

※当日先着順、入れ替えなし。

★折り鶴平和大使の活動報告会 時間 15:10～15:25

入場
無料

パレードへようこそ

2014年 イギリス 121分 日本語吹き替え・字幕付

上映時間 ①13:00～15:01 ②17:40～19:41



明日に向かって歌え!

1984年のイギリス、不況と闘うウェールズの炭坑労働者に手を差しのべたのは、ロンドンのきらびやかなLGSM(炭鉱夫支援同性愛者の会)の若者たちだった! すべては、ロンドンに住む一人の青年のシンプルなアイデアから始まった。境遇の違う人々をつないだ深い友情と感動の実話をもとにした映画。

©PATHE PRODUCTIONS LIMITED, BRITISH BROADCASTING CORPORATION AND THE BRITISH FILM INSTITUTE 2014. ALL RIGHTS RESERVED.

人権作文コンテスト

入賞作品

『言葉は心にのこる』

加茂小学校5年 本谷 健人さん



ぼくはある日お姉ちゃんとケンカをしました。カツとなつたお姉ちゃんは、突然「死ね」と言つきました。お母さんが「今何で言つた？」と言いながら近くにきました。お母さんは、とても悲しい顔をして泣いていました。泣きながら、お姉ちゃんをしかっていました。

お母さんは「その言葉は、人の心を深くきずつけるし、言われた人がすこと覚えているし、その人を大切に思つている人達まで悲しませてしまふんやで」と言つていました。

言われたぼくは悲しかつたけど、「ぼくの事を大切に思つてくれている人達まで悲しませてしまふ言葉があるんだなと知りました。

お母さんは、「ぼくとお姉ちゃんと」「あなた達がその言葉を言つ人にはなつてほしくない」と話してくれました。

その言葉を聞いて「死ね」という言葉は、ただおこつた気持ちをぶつける言葉ではなく、人の心に大きなきずを残す言葉だということを知りました。

紙にむかつてひどい言葉を言しながら、えんぴつで穴をあけました。ぐしゃと丸めて、ごめんなさいとあやまりました。その紙を広げても穴はふさぎません。言われた人は、いいよつて言つてくれても、そのきずは、薬や、ばんそうじうではなおせないし、一生のきずになる事をお母さんが教えてくれました。お母さんが泣いたのは、「ぼくを守るためにじやなくて、お姉ちゃんがそんな軽い気持ちで使つてしまつた事が悲しかつたんだろうな」と思いました。

人を悲しませる言葉は他にも、たくさんあります。だから、だれかに何か言つうとき、「この言葉を自分が言われたらどう思うかな」と考そられるようになりました。でも、まだカツとなつた時に悲しませるような事を言つてるかもしません。いやな気持ちになると思つたら、別の言葉を探します。「死ね」という代わりに「今は1人にして」「ちょっとおこつて」など、自分の気持ちを正面に言つえば、相手をきずつけないようにします。



ぼくは夏休みに、大きなかで開かれていた大阪・関西万博に行きました。はじめていつた時は、たくさんいろいろな形のたて物や、田の石や、人が作った細工で作られた動く心ぞうを見て、すこしなと思いました。そしてミヤクミヤクといつしょに歩こんでつたりしてとても楽しかつたです。

2回目に行った時に、お母さんに「ここを見よ。」

と言われ、ウクライナのパビリオンを見ました。そこはコモンズという、いろんな国の人たちが集まつていたのですが、ウクライナは他の国より、とてもなりでいる人が多かったです。たくさんの人が気になつて、うらやましくなっていました。そこでは今のウクライナのえいぞうを見ました。いつ落ちてくるかわからないばくだんにヒヤヒヤしながら、毎日をすごしていました。学校のまぢガラスがばくだんでわらわで使えなくなつて、地下を走る電車のえきでべん強をしているウクライナの人たちのえいぞうでした。ぼくはしぶしぶませんでした。ぼくのすゞいふの毎日とは全ぜんちがつたからです。

「でもこれは本当のことなんだよ。」

そして、ほかにも今、ウクライナのようじせんそうをしているパレスチナという国のパビリオンも見ました。

「パレスチナのガザ地区という場所が大きなひがいをうけてるんだよ。」

と、お父さんが言つていました。ぼくはウクライナのパビリオンを見とおどろいていたので、どんなパビリオンなのかなと少しわい気持ででした。でも、行つてみるとせんそうのことはまったく感じられませんでした。ぼくたちは日本人にとってパレスチナというガザ地区、ガザ地区というとせんそうというイメージが強いので、わざとそういうことを思われるてんじはしていないとパビリオンの人が言つていました。せんそうによつて人々のい動がとてもむずかしくて万ばく開く初日には、てんじ物が何もどぞかなかつたそうです。

ぼくにとって、この震の万ばくは、楽しいだけではなく、せんせうにつづつ教えるきっかけ

『ワンホールド・ワンフレッシュ』

陽明小学校3年 橋本 航さん



言葉は目に見えないけど、心に深くのこります。悪い言葉は心を暗くします。いい言葉は人を笑顔にします。だからぼくは、人をおとすような言葉ではなく、「元気にする言葉」を選びたいと思います。お母さんが泣いたあの口を忘れずに、やさしい言葉を使える人になりたいです。ぼくのまわりの人達が安心して語せるようにしたいです。

会場に到着すると、入口で係員の方が母に気付き、優先ゲートに案内してくれました。その時感じたバリアフリーについて、書きたいと思います。母は、線維筋痛症という病気を患つており、長時間の歩行や列に並ぶのは負担になります。杖を使用しました。どのパビリオンから回るのか、休憩や食事場所はどこにするかなと、3人で話し合いながら決めました。計画を立てる時間も、私にとっては、初めての万博といふこともあり、とてもワクワクする楽しい時間となりました。

会場に到着すると、入口で係員の方が母に気付き、優先ゲートに案内してくれました。スマートに入場できたことにとても安心し、心中で「こういう配慮があると、体が不由人も楽しめるな。」と感じました。

会場内を回ると、多くの海外のパビリオンは、細かい配慮が行き届いていました。妊婦さんや障がいがある人、サポートが必要な人でも安心して見学できる優先レーンがあり、誰もが快適に楽しめるよう工夫されていました。車椅子でも体験できるコーナーや、列の流れを調整する案内など、細部にわたる配慮に驚きました。母も笑顔で、「こういう工夫があると利用しやすくていいね。」と話してくれました。

一方、日本のパビリオンでは、まだ十分な配慮が行き届いていないと感じる場面が多くありました。優先レーンを設けていない日本パビリオンも多く、優先レーンがあつても、杖をついている母と介助者である私の2名までなどという人数制限がありました。

とある日本のパビリオンを訪れた際、日本のバリアフリーの遅れについて、実感する出来事がありました。そのパビリオンは、優先レーンで予約していたこともあり、とてもスマートに入場できました。パビリオン内にも優先レーンがあり、人が多くてもこれなら母も安全だなと思っていました。しかし、優先レーンは看板とテープの柵が所々にあるだけなので、元気な子供が母の横を勢いよく走り抜けるなど危ない場面がありました。近くにスタッフさんの案内もなく、転倒の恐れもあるので、足早にそのパビリオンから退出しました。

世界中から様々な人が集まる万博だからこそ、誰もが楽しめる工夫がさらに広がるとい

いなと思いました。日本のパビリオンでも、海外パビリオンの取り組みが豊富なことが多いと感じました。

この体験を通して、バリアフリーとは、母のような杖をついた人、車椅子の人、妊婦さん、小さな子供を連れた家族や高齢者の方、誰もが暮らしやすい生活を送るための社会全体の配慮だと考えました。誰か一人のための小さな配慮も、結局はみんなのための優しさにつながるのだと思いました。

万博は未来を描く場所です。だからこそ、未来の社会が「誰もが安心して楽しめる社会」であつてほしい、最新の技術や建物も大事ですが、人を思ひやる気持ちも未来を形づくる力になる、と私は思います。「これから先、日本が世界に誇れるバリアフリー先進国になるために必要なことは、一人の人を思ひやる気持ちであり、そのためには自身もまず身近なところから思いやりの行動を心掛けてきたことです。いつか日本が「バリアフリーで誰もが生活しやすい国」として世界中の人々から記憶される」と願っています。



8月9日(土)平和祈念式典に参列

草島

参列した、式典には、赤ちゃんから高齢者まで、いろいろな年代の人や世界各地の人が多く参列していました。そこでは代表者が、様々なスピーチをしてくれました。会場にいると、全員が「世界平和」を望んでいることが伝わってきました。

心に残ったことは、「核兵器のない世界の実現」という言葉です。この世界には、まだたくさんの核兵器が存在し続けていること、今、この瞬間も戦争をしている国があることを思いました。

中井

私は、式典でとても印象に残ったのは、被爆者代表の西岡洋さんの『平和に繋がるこの動きを絶対に止めてはいけない、さらに前進させよう、そして、仲間を増やしていくことが、私たちが目標とすることです。』という言葉でした。この動きというのは、日本原水爆被害者団体協議会が2024年にノーベル平和賞を受賞し評価されたことによって、世界中の人々が見ているこの機会に、核兵器廃絶をいっしょに求めていこうということだと思います。私自身も行動し続け、平和と一緒に訴え続けてくれる仲間を増やしていこうと思いました。



平和の泉(公園内)

草島

平和の泉には、9才で被爆した少女の手書き文字が彫られていました。「…のどが乾いてたまりませんでした。水には、あぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました。一あの日のある少女の手記から」という文章です。読んでいて、どうしてもこの子に水を渡してあげたい、そう強く感じました。こんな思いをする子が、どこにもいない、平和な世界であってほしいと思いました。



戦後・被爆80年

2025(令和7)年

折り鶴平和大使のナガサキ日記



川西市では、「非核平和都市宣言」の趣旨にのっとり、市民平和推進事業として、2025年度は長崎への「折り鶴平和大使」派遣事業を実施しました。

今年度の折り鶴平和大使に公募で選ばれたのは、牧の台小学校6年の草島采和さんと川西南中学校1年の中井紗映さんです。

2人の大使は、8月9日に長崎市で開催された平和祈念式典に市民の代表として参列するとともに、市民が平和の願いを込めて折ったリンドウ色の折り鶴を平和公園内にある「折鶴の塔」に捧げました。

ここでは、2人の大使の派遣後の活動報告を掲載します。



※市民が折った約1万4千羽の折り鶴

7月28日(月)市役所にて壮行式

中井

折り鶴平和大使として出席した壮行式では、川西市民が心を込めて折った折り鶴を越田市長から受け取り、それを代表して長崎へ届け、平和を願う、という、とても重要な役目を担っていることに、身が引き締まりました。



8月8日(金)長崎到着

草島

初めに平和公園に行きました。公園内に建てられている男の人の銅像(平和祈念像)の顔は被爆者を追悼し、上に指している手は原爆のことを指し、横にしている手は世の中の平和を意味しているそうです。銅像の部分ごとに意味があることを初めて知りました。とても多くの願いを背負っているんだな、と感じました。



折り鶴を捧ぐ

中井

折り鶴を奉納する場所には、数えきれないほどの折り鶴がありました。幼稚園など小さい子から、原子爆弾を経験した高齢者まで、日本中、いえ世界中から折り鶴が捧げられていました。そして私は、千羽鶴に込められた思いを川西市から伝えていこうと思いました。



長崎原爆資料館などを見学

草島

原爆資料館では、特に印象的だったのは、4年生の男の子の「お母さんを焼いた運動場」という文章です。被爆して亡くなったお母さんを火葬した場所で、黒い炭のかけられを見つけた、という話でした。そこからは、死んでしまったお母さんに会いたいという気持ちがとても伝わってきました。自分の通っている学校で、たくさん的人が亡くなり、焼かれる、おかあさんともお別れをする、ということを想像するだけで、胸が苦しくなり言葉にならない思いになりました。



中井

資料館の展示物を見つめて3時間。広島の資料館で見たものと同じくらい残酷で悲惨なものがありませんでした。そのうちの一つが「手の骨とガラス」です。これは、人間の手の骨とくついたガラスの塊が、爆心地付近で見つかったものです。それを見ていると、その人がなぜこんな目にあって亡くななければならなかったのかと悲しみがこみ上げてきました。原子爆弾の悲惨さを知るとともに、被爆者や遺族の気持ちに思いを巡らそうと思いました。



折り鶴平和大使になって

草島

折り鶴平和大使として2日間、長崎に行ってわかつたことは、これまで以上に戦争や原爆の恐ろしさや、平和や命の大切さを知ったこと、語り継ぐことの大切さです。

私自身も、ひいおばあちゃん、おばあちゃん、母、私へと、語り継がれたことで、ひいおばあちゃんが、原爆のきの雲を見ていたことを知りました。色々な人が多くの人に語り継ぐことにより、80年という長い間、原爆は忘れられず、記憶され、世界を平和にする活動が行われています。

しかし、戦後80年がたった今も、なぜ、世界から核兵器がなくなるのか?疑問に思いました。どうしたら、世界から、戦争や核兵器をなくすことができるのか、これからも考え続けていきたいです。

非核平和都市宣言

世界中の人々が等しく平和な暮らしを営むことは、人類共通の願いです。

それにもかかわらず、地球上の全生命を滅ぼしてもなお余るほどの核兵器が蓄積され、世界の平和に深刻な脅威を与えています。

わが国は世界で最初の核被爆国として、核兵器と戦争の恐ろしさを全世界に訴え、その惨禍を絶対に繰り返させてはなりません。

中井 私が今回、長崎に実際にやって感じたことは、長崎の人々の「祈り」とは、まず原子爆弾の犠牲者への心からの追悼のことであり、加えて、核兵器のない世界を願うことだと思います。

また、被爆者の方々が常に語っている『核のない世界を目指しましょう。核兵器を使ってしまうとすべてが終わってしまいます。』は、原子爆弾の悲惨さや平和の尊さを次世代に伝えようとしている改めてわかりました。

私は折り鶴平和大使として、まず家族や身近な友人に、今回長崎で見たことや感じたことを伝えました。そして、川西市民に長崎の原爆被害や祈りについて知ってもらうために活動していきたいと思います。

非核平和都市宣言

私たちは祖先から受け継いできた猪名川の清流、豊かな緑、そして人類共通の財産である青く美しい地球を永遠に守り続けていくためにも、核兵器をつくらず・持たず・持ち込ませぬの「非核三原則」を遵守するとともに、恐るべき核兵器の廃絶を願い、人と人が憎しみあい傷つけあうことのない世界の創造を求めて、ここに市民の総意のもと、川西市を「非核平和都市」とすることを宣言します。

平成元年(1989年)7月14日 川西市

2025年は6人の市民の方から寄稿いただきました。
そのうち2編をご紹介します。

戦争にまつわる体験記

私は戦争体験者

村山 優子さん 91歳

私の戦争体験は台湾でした。引き揚げ者です。日本本土の戦況と違っていたかもしれません、戦争の恐ろしさは同じだと思います。

日本がハイイを攻撃したのを皮切りに、第2次世界大戦が始まりました。その時、私は台湾の国民学校の1年生でした（父母は父の仕事の関係で台湾へ渡り、私はそこで生まれました）。初めてのちは「勝った勝った」と提灯行列をして喜んでいましたが、その後の状況の悪化はずっと知らされませんでした。家の近くに特攻隊の飛行場※があり、近くの日本人の家には2、3人の予科練生が下宿していました。私の家にも2人が出入りしていました。多分、17、18の青年だったと思います。「お兄ちゃんお兄ちゃん」と呼んで遊んで貰いました。滞在期間は覚えています。遺書を書く時はどんな気持ちだったのか、辛いです。

鹿児島県の知覧町には同じ年代の人の遺書が展示されています。病気になり、食べるのもなく薬もなく、肺病で42歳で亡くなりました。その後には「バス」と「ストレプトマイシン」という肺の薬ができ、今では結核で亡くなる人は殆どいないようです。残された3人の子供（6年生、3年生、2才）は、みんな母が育ててくれました。すごい苦労だったと思います。いくら感謝しても足りません。書き進めていると母をしきりに想い出します。

翌昭和21年3月末に着の身着のままで日本に戻りました。折角苦労して日本に帰ってきたのに、帰ってきてすぐに父は病気になりました。その後には「バス」と「ストレプトマイシン」という肺の薬ができ、今では結核で亡くなる人は殆どいないようです。残された3人の子供（6年生、3年生、2才）は、みんな母が育ててくれました。すごい苦労だったと思います。いくら感謝しても足りません。書き進めていると母をしきりに想い出します。

戦争が熾烈になり、私たちは（台湾の）山奥へ疎開（逃げる）しなければならなくなりました。疎開する時も突然山間から敵機が現れるというとても恐い目にありました。

延々と4年つづいた戦争は昭和20年8月15日で終わりました。それからは日本人は殺されると言う噂が飛び交い、慌てて

病気になり、食べるのもなく薬もなく、肺病で42歳で亡くなっています。その後には「バス」と「ストレプトマイシン」という肺の薬ができ、今では結核で亡くなる人は殆どいないようです。残された3人の子供（6年生、3年生、2才）は、みんな母が育ててくれました。すごい苦労だったと思います。いくら感謝しても足りません。書き進めていると母をしきりに想い出します。

25年前、夫とハイイに旅行に行きました。（夫は20年前に亡くなりました）その時、真珠湾にも行きましたが、この時はほとんど日本人として恥ずかしく、済まない気持ちでいっぱいになりました。世界のあつちうちで争っている国があります。その国の指導者が考えを改めて世界が平和になりますように祈っています。

※台湾にも特攻隊の出撃基地がいくつか存在しました。特攻隊は主に南九州の基地から行わましたが、台湾にも宜蘭（ギラン）、花蓮（フアリエン）、澎湖諸島の望安などに旧日本軍の飛行場跡や関連施設が残っており、特攻隊たちの出撃や壮行の場となりました。

疎開先での爆弾、B29、防空壕、防空頭布の思い出は今も頭から抜けません。

また、兄が出征する時の悲しみ、みかん箱の上に立ち、近くの人々に見送られる姿を見て、妹の私としては死を覚悟をして見送りました。それから暫くして、伊丹にある陸軍の千僧兵營に配属された兄に面会に行くと、上司の命令に従い、靴ぞれのため足をひきずり、泣きながら歩いている兄がいました。その後、兄は目が悪くなり兵隊として役に立たない人間となり除隊され、哀れな姿で帰っていました。

「ああ、よかつたね」と私は兄を抱きしめました。近所の知人は特攻隊で飛行機にのろうとしたが、飛行機が故障して助けたと聞きました。お国のために命を捧げないと駄目な人間と云われていましたが、命の尊さが私には国を大切にすることだと信じていました。命あってこそ。

戦後、川西の花屋敷に住居を構えることになりました。近所の大きな家にはアメリカ進駐軍が占領して住んでいました。そこで、よくバナナを食べているアメリカ人を見かけました。私も食べたいと思いました。でもなぜかバナナは家にはありませんでした。

その後も兄は母の世話をよくしてくれ、私は安心して生活出来ました。兄の息子たちも立派に成人し世の中で活躍しています。現在、私は川西で、さやかコーラスに参加させてもらっています。やなせたかさん作詞の悲しい、さみしい曲をうたっています。戦地へ行き、命を絶たれた方、残された人々の悲しみが伝わってきます。戦争の悲しみは、現在も続いています。心の傷跡は消えることはありません。この悲しみをパワーに変えて、平和な世界でありたいと祈り続けています。

卒寿を越えた今も「長崎の鐘」藤山二郎さんのうたわれた曲を下手ですがピアノで弾きながら、平和の鳴を飛ばしています。

日本がハイイを攻撃したのを皮切りに、第2次世界大戦が始ま

りました。

我が家は、母の実家がある三田の相野（それまでは大阪の十三に住んでいました）に3つ年下の弟と疎開していました。そこで、小学6年生の時に終戦になりました。その直前までは、爆弾の恐ろしさの続く日々でした。

終戦と云う言葉がラジオから流れた時、日本が敗けたと

私は、母の実家がある三田の相野（それまでは大阪の十三に住んでいました）に3つ年下の弟と疎開していました。そこで、小学6年生の時に終戦になりました。その直前までは、爆弾の恐ろしさの続く日々でした。

終戦と云う言葉がラジオから流れた時、日本が敗けたと

第16回

令和7年度
人権写真
コンテスト in かわにし

フォト

入賞作品紹介

テーマ「多文化共生」

特別賞



大事な命を「いただきます」

中西 友里愛 さん(新田)

初めて魚を捕まえ、串にも刺せっていました。
頭から尻尾まで残さずすべて食べていました！

特別賞



優秀賞

Tea ceremony (ティー セレモニー)

芝田 駿斗さん・フレイザー マクフェイルさん(石道・豪州)

9月下旬にオーストラリアから地元の高校に交換留学生23名が来て、
日本文化学習会として高校の作法室で茶道(裏千家)体験をしました。

人権推進多文化共生課では、さまざまな人権や平和に関する学習教材 (DVD・書籍・紙芝居) を貸し出しています。
学習・研修会などにご活用ください。

※個人利用も可能です

【例】DVD: 「バースデイ」「折り梅」

紙芝居「まもるくん 十歳の戦争 吹田」(平和)

※市総合センターでも貸し出しています。



詳しくは
こちら▶

★12月10日～16日は、北朝鮮人権侵害問題啓発週間です。

～北朝鮮当局による人権侵害問題（拉致問題）に対する認識を深めよう～

★啓発コーナー：川西市役所・市民ギャラリー 2025年12月4日（木）～15日（月）

：川西市総合センター 2025年12月8日（月）～12日（金）



クイズ ?

次の空欄 (○) の中に適当な文字などを入れてください。

- 今年(2025年)度の「折り鶴平和大使」は〇〇市で開催された平和祈念式典に市民の代表として参加しました。
- 本年、令和7(2025)年は、日本の「戦後・被爆〇〇年」です。
- 今年度の人権写真（フォト）のテーマは、「〇〇〇共生」です。

※クイズ正解者には、図書カード(1,000円分)を5人に差しあげます。(正解者多数の場合は抽選。図書カードの発送をもって発表にかえさせていただきます。)

応募方法 ハガキに①クイズの答え、②住所、③名前、④年齢、⑤電話番号、⑥今回の「広報じんけん」で興味のあった記事と感想を書き、下記のあて先まで

あて先 〒666-8501 川西市 市長公室 人権推進多文化共生課「クイズ」係 しめ切り 令和7年12月15日(月)消印有効